

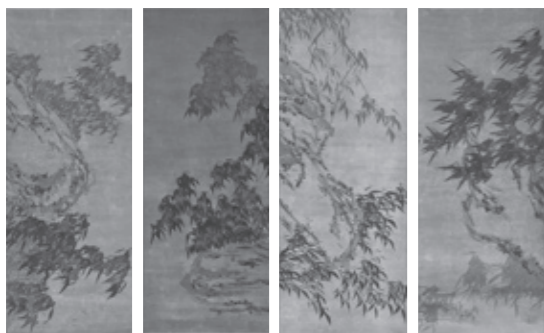
平成27年度新収蔵品

平成27年度の購入及び寄贈により、当館のコレクションに新たに加わった4作家の作品を紹介します。

吉田 蔵澤 (1722-1802)

蔵澤は、江戸時代中期の松山藩士で、風早(現・松山市北条)と野間(現・今治市)の二部の代官を長らく務め、民衆から絶大な信望を集めたと言われます。その一方で若い頃から絵を好み、当時流行していた長崎経由の中国絵画の影響を受けた、雄渾な墨竹図を得意としたことから「竹の蔵澤」と称され、今も愛好家が多く存在します。かの正岡子規や夏目漱石もその作品を好んで入手しました。

今回収蔵されたのは、掛軸8幅対と六曲一双屏風が2対という大作ばかり。全て、愛媛を代表する企業の一つである(株)三浦工業創業者・三浦保氏(1928-96)の夫人・昭子氏からのご寄贈によるもので、現存する蔵澤作品の中でも屈指の名品として知られていたものです。これまで当館が所蔵する蔵澤作品は、比較的小品が多かっただけに、大変充実したコレクションになりました。時に繊細に、時に豪放に、墨一色で、風に幹をしなせ葉を揺らす竹の様々な表情を描き分けるそのテクニックは、お見事というほかありません。(長井)

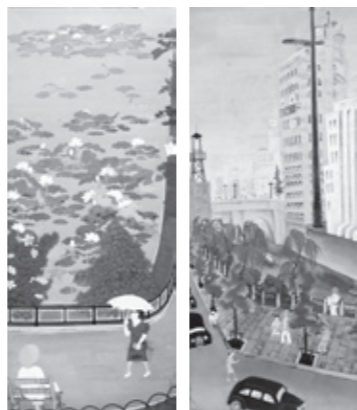


吉田蔵澤《墨竹図》(部分)江戸時代中期 三浦昭子氏寄贈

木和村 創爾郎 (1900-1973)

愛媛の創作版画を代表する存在である木和村(松山市出身)は、大型の画面に、山岳や崖壁などの自然形態を大胆かつ幾何学的リズムで表現する迫力ある作風で知られます。日展や光風会展などで活動し、棟方志功・前川千帆らと日版会を結成、後年はフランスの国際公募展であるル・サロンで金賞を受賞するなど、版画家としての評価はすでに定まっている人ですが、もともとは京都市立絵画専門学校で日本画を学び、昭和18年(1943)に版画家に転向するまでは、日本画家として活動していました。

今回収蔵された2件の屏風作品は、いずれもこの日本画家時代の作です。戦時下に失われてしまったためか、その大半が現存しないと思われるこの時期の作品の中でも、制作年や出品歴が判明し、かつ精緻な技術による大作である点で極めて価値の高いものです。これによって、木和村の初期の画業を把握することができる、基準的作例として位置づけられます。なお、描かれているのはいずれも、東京の実景(浅草寺や不忍池など)で、戦前の東京の風景・風俗をとらえている点でもユニークな作品です。(長井)



木和村創爾郎
《不忍池・数寄屋橋群(新東都四景のうち)》
昭和11年(1936)

田窪 恭治 (1949-)

フランスのノルマンディー地方でのサン・ヴィゴール・ド・ミュール礼拝堂(内壁に田窪が描いた地域の特産物である林檎により、「林檎の礼拝堂」として親しまれている)の仕事や、金刀比羅宮での数々の文化プロジェクト等で「風景芸術」へと展開し、現在も活躍中の田窪恭治(愛媛県今治市生まれ)による作品です。

この作品は、パフォーマンスを活発に行っていた初期の時代から廃材と金箔による作品制作に移った最初期の作品であり、身体の痕跡(田窪本人の手の跡)がくっきりと彫られているのが特徴です。田窪がこの時期に正に美術家として生きる決心をしたという30歳頃に制作された、記念すべき作品です。

田窪の木との関わりを紹介する展覧会が東京都美術館で開催されます。(杉山)



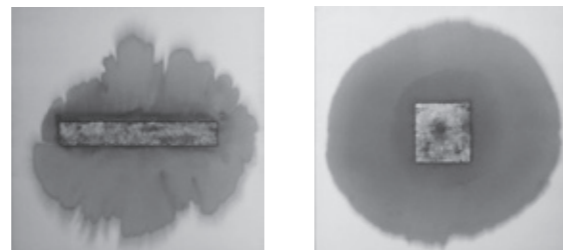
※「開館90周年記念展 木々との対話 -再生をめぐる5つの風景」
7月26日(火)~10月2日(日)
東京都美術館

田窪恭治
《OBELISK(PACK EVENT)》1979年

浅山 仁 (1948-2014)

浅山仁(愛媛県松山市生まれ)は、洲之内徹らと青年美術家集団を立ち上げた渡部徹が1966年に設立した、松山美術研究所の一期生として学びました。多摩美術大学時代には、斎藤義重に学び大きな影響を受けています。1972年7月には渡部徹の死去に伴い松山美術研究所を引き継ぎ、また1975年には松山デザイン専門学校で教鞭を取り始め、後に校長も務めました。教育活動に力を入れる一方で県内および中四国において精力的に作品を発表し、墨という物質の持つ表現の可能性を探り、深い思索に基づいた制作活動を続けました。

この作品は、墨と和紙、そして綿布という日常的な異なる素材を用い、組み合わせで成立しています。墨は浅山が画業を通して用い続けてきた描画材で、その物質の持つじむ性質により、制作者の意図の関与しないところで作用する点にも注目していたのです。墨が綿布や和紙に染み込む自然の力と、制作者としての表現との狭間で独自の哲学をもって思考し、制作に打ち込んだ浅山の代表的な作品といえるでしょう。(杉山)



浅山仁(WORK IX)右(WORK X)左 各1988年3月

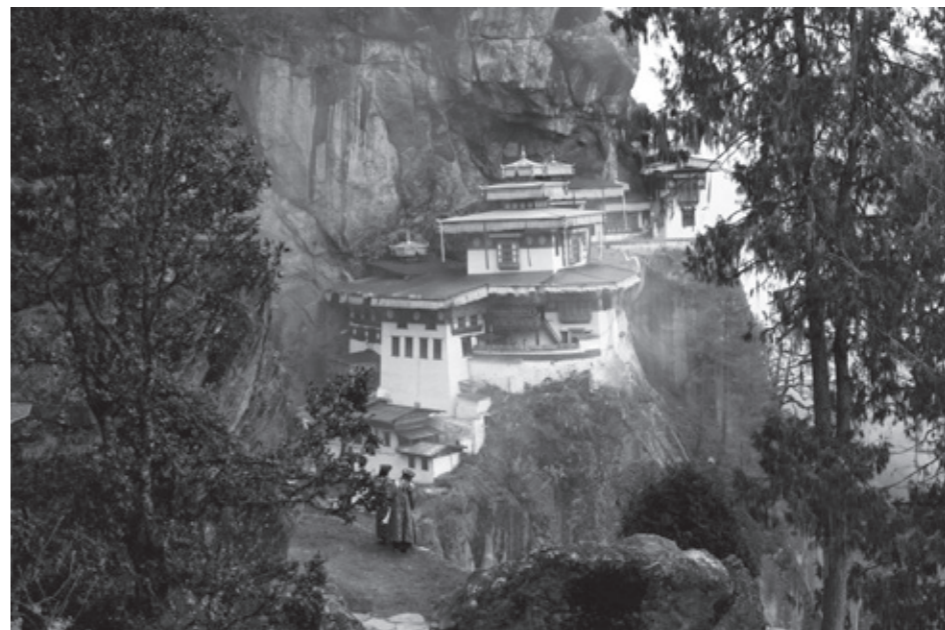
Canforo No.52

カンフォロ

愛媛県美術館ニュースNo.52 2016

愛媛県美術館ニュースNo.52 2016
発行日=平成28年7月10日
編集・発行=愛媛県美術館
執筆者=高橋仁、榎岡秀一、長井健、杉山はるか、喜安嶺、八木誠一、鈴木有紀、田代亜矢子、石崎三佳子

Canforo
カンフォロとは?
イタリア語で「くすのき」を意味します。
愛媛県美術館の中庭に立つ3本の大きなくすのきにちなんでなづけられました。



《女性用衣裳 キラ》20世紀後期 ブータン王立テキスタイルアカデミー所蔵

BHUTAN

日本・ブータン外交関係樹立30周年記念事業

特別展 ブータン

~しあわせに生きるためのヒント~

2016年7月30日(土) ~ 9月19日(月・祝)

主催：特別展「ブータン」愛媛実行委員会(愛媛県、愛媛新聞社、テレビ愛媛、東映)

ヒマラヤの奥地にあるブータンという国をご存じですか?

この国はGNH(グロス・ナショナル・ハピネス=国民総幸福)という言葉のもと、あえて近代化を急がない政策をすすめています。2005年の国勢調査では、「あなたはいましあわせですか?」という質問に、調査対象者の約97%の人が「とてもしあわせ」、「しあわせ」と回答しました。

なぜこれほど多くの人が「しあわせ」を感じているのでしょうか。「しあわせ」とは何でしょうか。

本展覧会は、外務省による日本・ブータン外交関係樹立30周年記念事業の認定を受け、「ブータン王国国立博物館」、「ブータン王立織物博物館」、「ブータン王立テキスタイルアカデミー」の全面協力により、チベット仏教に関する仏像、仏画、法典や、お祭で使うお面や楽器、織物など、貴重な文化資料を日本で

初めて公開します。さらにブータン王室のロイヤルコレクションから、国王の衣裳・装飾品なども初公開。展示品約130点でブータンの魅力をたっぷりと感じていただけます。

また本展覧会は、イラストレーターの松尾たいこ氏をアートディレクターに迎えました。展覧会場は、本展覧会のためにブータンを訪れた松尾氏の優しくさわやかなイラストにより、ブータンに伝わる名言や智恵とともに、ブータンの和やかな空気を感じさせる魅力あふれる空間となっています。

本展を通してブータンの人々の「しあわせ」に触れるとともに、私たちがこれからの時代を生きていく上での「しあわせになるためのヒント」が、きっと見つかることでしょう。(八木)



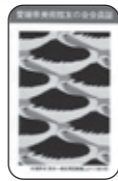
《アツアラの面》現代
ブータン王国国立博物館所蔵



愛媛県イメージアップ
キャラクターみきゃん



ハトの声
編集後記



猫プームということで、いろいろなメディアで猫が話題に。当館でもプームにのって「いつだって猫展」を開催します。猫より鳥に目がない私が気になるのは、今年度の友の会会員証の図版。杉浦非水の図案を使用しているのですが、モチーフはペリカン?サギ?なんの鳥かが議論になっています。(石崎)

